

名医シリーズ

信 頼 の 主 治 医

明日の
医療を
支える
信頼の
ドクター

2021
年版

医療法人明和会
宮田眼科病院

信頼の
主治医

都城の地から
最高レベルの眼科治療を提供し続けます

最先端医療とハイレベルな 研究が融合した全国屈指の眼科病院

白内障と角膜移植の第一人者が実践する患者本位の最新治療



医療法人明和会

宮田眼科病院

理事長・院長

宮田 和典

人間は情報の8割を視覚から得ており、快適な生活を送るためのカギは眼の健康にあると言っても過言ではない。しかし日本眼科学会によると、白内障や糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、近視性網膜症といった眼の病気が60代以降、一気に有病率が高まるという。高齢化が進む中で、眼科医療に対する期待は極めて大きい。

宮崎県都城市にある医療法人明和会宮田眼科病院は、九州全域はもとより関西や東京など全国各地から年間延べ10万人以上の患者が訪れる。それはわが国でもトップクラスの優れた最新の医療サービスが受けられるためで、「患者さんのために良いと思つた医療技術や医療機器は、手間暇や費用を惜しむことなくためらわずに導入します」というのが宮田和典院長の基本的なスタンスだ。

「当院に来てくださった患者さんには、わが国の第一級レベルの医療を受けていただくことが院長としての責任と考えています」と熱く語る宮田院長。単科病院でありながら総合病院、大学病院に勝るとも劣らない高度な治療レベル、医療設備を誇る。そして患者からの厚い信頼を一身に担う頼れる医療としての実績が、その言葉の何よりの証明と言える。

治療と研究の両立で他院を圧倒するハイレベルな医療を実現

何より患者のために最先端医療・設備の充実に努める

宮田眼科病院が他院を大きく引き離す優れた医療を提供できる最大の理由は、治療と研究の両立にある。一般的に治療は総合病院や単科病院が、研究は大学病院が担うとされているが、宮田眼科病院では宮田院長の「患者の治療のために常に新しい医療を取り入れ、必要なら自分たちで考案する」という強い信念のもと不断の研究を行っている。

その研究成果を治療に活かすというサイクルを繰り返すことで、全国でも屈指の高度医療、先進の医療を提供しているのだ。またそのための最先端の医療設備機器の導入に余念がない。

宮田院長が全国で先駆けて導入し、現在では一般的になった医療機器も枚挙にいとまがない。例えば顕微鏡に取り付けたカメラの映像を3Dモニターで見ながら手術を行う「3Dビジュアルシステム」や、白内障や角膜移植などの手術に用いる「フェムトセカンドレーザー」などがそうだ。

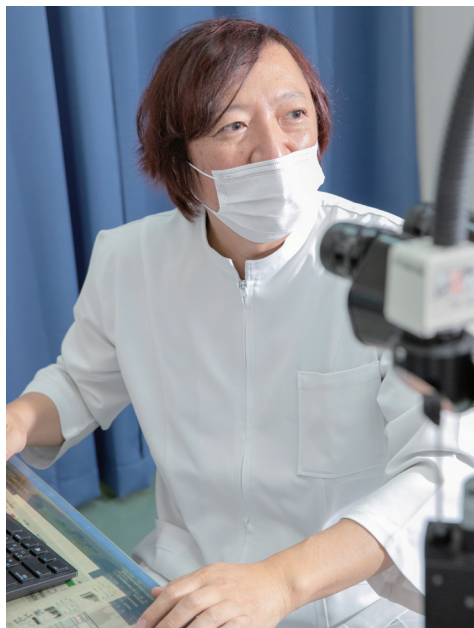
さらには近視治療に使われる「エキシマレーザー」や、検査時の痛みを大幅に軽減する「皮膚電極網膜電図」など、宮田院長が基礎研究や開発から携わった機器も数多い。

こうした精力的な活動の源になっているのが、宮田院長の信念である「Patient based Medicine」(ペイシエントベースドメディスン)患者に基づく医療だ。言い換えれば、個々の患者のために最適な医療を追求することである。

「当院のコンセプトは、この都城という場所で東京や大阪などの大都市に引けを取らない医療を提供することです。自分たちの努力で患者さんが『治った』と喜んでくださることが何より嬉しいです」と宮田院長。

わが国トップクラスの眼科医療を誇る宮田眼科病院を支えているのは、宮田院長の医師として、また病院経営者としての類まれな手腕によるところが大きい。科学者としての医師と経営者としての病院理事長はドラマなどではよく対立的に描かれるが、その2つの職責を兼務して大きな成果を上げているのである。

「最新治療だからといってただ導入するのではなく、治療した患者さんを5年から10年ほど経過をトレースしてしっかりデータを取ります。しかし、治療によっては保険診療の対象外のケースもあります。その時は病院が負担しますので、経済的に厳しい面もあります」と屈託のない笑みを浮かべる。宮田院長の「Patient based Medicine」(患者に基づく



角膜移植と白内障治療の第一人者として
日々全力投球する

医療)の姿勢は微塵も揺らぐことはない。

白内障・角膜移植の第一人者として常に最新情報をキャッチ

民間病院のメリットを生かし日々チャレンジを続ける

宮田院長は平成20年に日本で初めて人工角膜「Boston KPro」の移植を成功させた眼科医でもある。国内において通常の角膜移植では改善できなかった症例の治療を開拓したこと、宮田院長の存在は眼科医の間で大きな話題となった。

「今はコロナ禍で海外の学会に参加できませんが常にアンテナを張り、日本では行っていない最先端手術で良いものがあれば取り入れるようにしています。大学病院は様々な制約がありますが、当院のような民間病院はかえって小回りが利きます。このため最新の手術を当院で手掛けるケースが多いです」と宮田院長。

20年以上も前になるが、宮田院長が就任する以前の宮田眼科病院では、多い時には200人以上の患者が角膜移

植を待っていたという。

「大学ノートに手術を希望する患者さんの名前が並んで記載されていました。名前の上に線を引いてある箇所が多かったので、順調に手術が進んでいるのだなと思ったり、移植前に亡くなった方でした。国内では角膜がほとんど手に入らず、しかも患者の多くが高齢者なので、間に合わなかったのです」

こう語る宮田院長だが、その後角膜を海外から輸入し精力的に移植手術を行った結果、現在では角膜手術の待機患者ゼロを実現している。

白内障もまた宮田院長の専門分野だ。国内でも圧倒的に患者数の多い白内障だが、近年では治療に使うレンズの種類が増えて治療の選択肢も広がった。宮田眼科病院では多くの治療を行い、そのデータをフィードバックしてそれぞれの患者の症状に最も合う最新のレンズを導入している。

例えば主流だった「二焦点レンズの弱点である中間距離の見にくさを解決し、手元・中間距離・遠くの3点にピントが合う眼内レンズを実現した三焦点レンズがそつだ。さらにEDOF（イードフ）焦点深度拡張型レンズ）は光を遠くと近くに振り分けることなく見える範囲を広げるので、見え方の質を重視する患者や、緑内障、網膜疾患などを患いながら老視の矯正をする患者に用いられる。

「それぞれのレンズに長所と短所がありますが、データのおかげで自信をもって最適なレンズを選択できます」と宮田院長。角膜移植と白内障治療の第一人者としての日々の治療に全力投球する。

実父から引き継いだ病院を進化させ、最高の治療を提供する

遠方の患者のため、鹿兒島に鹿兒島宮田眼科を開業



宮田院長手術風景。手術件数は年間約 8000 件を誇る

宮田眼科は昭和35年、宮田院長の実父である宮田典男医師が開業した。「地方でも最高の医療を提供する」と治療に打ち込む父とそれを手伝う母は、多忙な毎日を送っていたという。

「父に『医者になれ』と言われたことは一度もありませんが、私は父とよく似たタイプの医師だと思えます」という宮田院長。宮田少年は名門の鹿児島県・サール中高へ入学し地元を離れた。久留米大学医学部へ進学した後、医師免許を取得して東大の医学部眼科へ入局。ここでも研究や手術の研修に没頭し、自宅に手術用の顕微鏡を用意して技術を磨いた。

着実に実績を積み重ねて、平成3年に東大医学部眼科の講師になり、平成6年に米カリフォルニア大サンフランシスコ校に留学。当時、不可能とされていた眼の角膜内皮細胞の培養に成功し注目を集めた。研究者としてより高みを目指す選択もあったが、宮田院長は臨床医として父の跡を継ぐ決意をする。

「僕がここまで来られたのは、病院があつたからです。患者さんがたくさん来ていた দিয়ে いましたし、勤務しているスタッフも当時百数十名いて、その人たちに対する責任がありました。もともと医者になるからにはここを継ごうと思っていました」と振り返る。12歳で県外に出た宮田院長は、二十数年ぶりの帰郷と

なった。

平成16年には鹿児島市に鹿児島宮田眼科を開業した。当時、宮崎県と鹿児島県の県境にある宮田眼科病院には鹿児島県からも多数の患者が来院しており、離島や遠来の患者の通院が大変だったため、新たに眼科医院を開設した。

「都城の宮田眼科病院と鹿児島宮田眼科、どちらも同じく高い医療レベルを維持する必要がある。このためドクターは両院を行き来して治療にあたっています。私も鹿児島で診療に当たりますし、鹿児島宮田眼科で院長をしている大谷先生は緑内障の第一人者なので、必要に応じてこちらにも来てもらっています」

令和3年2月現在、医療スタッフは両院合わせて230人、手術総数は年間約8,000件、1日の平均来院患者数は500名以上、を誇る。父から受け継いだ宮田眼科病院は大きく発展を遂げた。

地元にも多い目の感染症に悩む患者を救いたい

抗生物質を用いない感染症の治療法を研究中

宮田院長は現在、眼の感染症の研究に取り組んでいる。宮崎県は全国でも1、2を争うほど降水量が多く、東京の2倍、沖縄県の1.5倍の降雨量を記録する。さらに気候が温暖なため湿度が高く、細菌やカビ（真菌）、ウイルスが活動しやすい環境のため眼の感染症に悩む人が多い。

感染症の原因は大きく2つに分けられる。1つはコンタクトレンズを正しく扱わないことによるものだ。若い世代に多く、使い捨てコンタクトレンズの普及でひどく減少していたが、最近

はカラーコンタクトレンズによる感染が増えているという。カラーコンタクトレンズはドラッグストアなどで手軽に購入できるが、間違った使い方をすると感染症に罹ってしまう。もう一つは屋外作業をしている時に眼の外傷から菌が入り込むというもので、高齢者に多い。

宮田眼科病院には感染症分野のプロフェッショナルが在籍し、各大学や全国の主要病院による感染症のサーベイランス（調査監視）にも参加している。国内の眼の感染症症例の実に3分の1が宮田眼科病院で扱ったものだという。宮崎県は感染症が多い土地柄だけに、宮田院長が眼の感染症研究に力を入れるのも頷ける。

「まだ実験の段階ですが、現在抗生物質を使わずに感染症を治療する方法を研究しています。抗生物質は有用ですが、耐性菌を作ってしまうという問題点があります。この研究が成功すれば、感染症に悩む患者さんの負担を減らすことができます」と宮田院長は声を弾ませる。

「宮田眼科病院で研修に行ってきたさい」といわれる病院に

最先端医療や人材育成など、全ては「患者さんのために」

「他では無理でも宮田眼科なら治してくれる」と期待を膨らませて訪れる多くの患者を治療し、感謝されている宮田院長。「患者さんの喜んだ表情は印象的ですが、忘れられないのは治せなかった患者さんのことですよ」と宮田院長。

「私が新しい治療や医療機器にこだわるのは、『これがあったらあの患者さんを治せたかもしれない』という悔しさをやしなすためです。治せなかった無念さは残りますが、様々な想いを抱えながらも患者さんのために前に進むしかありません」



宮田眼科病院外観

さらに前進を続けるため、宮田院長は人材の育成にも力を入れる。宮田院長をはじめとするドクターたちのハイレベルな技術を学びたいと、宮田眼科病院の門を叩く研修医は後を絶たない。2021年2月の時点では東大、筑波大から各2人、阪大、神戸大からそれぞれ1人ずつの研修医が基本的技術や臨床研究の方法、患者との接し方、手術の技術などを学んでいる。

優秀な人材が来るのは嬉しい反面、しっかりと育てなければというプレッシャーを感じるという。それでも人材育成に力を入れるのは、「宮崎県の都城まで研修医が、手を挙げてでも行きたい」と思わせる病院であれば、優秀な人材が集まると思うからです」と語る。

大学の医局から、『ぜひ宮田眼科病院に行ってください』と言われるような病院であるためには、コ

ンセプトをしっかりと研究と優れた治療を提供することに繋がる。宮田院長の想いは一貫して「患者のため」

ひいては患者により良い医療を提供することにある。

今後については、「理想を求めて夢みたいなことをやっているの、一日でも長くこの状況で続けたい」と笑う宮田院長。大都市圏と肩を並べるどころか、全国から目標とされる眼科医療を背負う宮田院長の挑戦はまだまだ終わる所を知らない。

PROFILE

宮田 和典 (みやた・かずのり)

昭和33年生まれ。宮崎県出身。昭和59年久留米大学医学部卒業。同年東京大学医学部眼科入局。助手を経て講師となり、平成6年にカリフォルニア大学サンフランシスコ校に留学。同9年に医療法人明和会宮田眼科病院副院長に就任。同11年同院の院長に就任。同12年宮崎大学臨床教授兼任。同20年宮田眼科理事長・院長に就任。

所属・活動

医学博士、眼科専門医、宮崎大学臨床教授、専門研修指導医、ICD認定医、日本眼科学会評議員、日本眼科手術学会理事、日本角膜移植学会理事、日本角膜学会理事、日本角膜学会評議員、日本白内障屈折矯正手術学会理事、日本白内障学会評議員、日本眼感染症学会評議員、日本アイバンク協会評議員、宮崎県眼科医会理事、宮崎県アイバンク協会理事

医療法人明和会 宮田眼科病院

<http://www.miyata-med.ne.jp/>

INFORMATION

所在地

〒885-0051 宮崎県都城市蔵原町6-3
TEL 0986-22-1441 FAX 0986-24-2174

アクセス

JR日豊本線 西都城駅で下車 徒歩約10分

設立

昭和35年

診療内容

眼科全般

病床数

71床

診療時間

月曜～金曜 / 8:00～16:30 土曜 / 8:00～12:00 / 休診日 / 日・祝日



医療法人明和会 鹿児島宮田眼科

INFORMATION

所在地

〒890-0046 鹿児島県鹿児島市西田1-5-1
鹿児島高見橋ビル 1F・2F
TEL 099-286-1213 FAX 099-286-1190

アクセス

JR鹿児島本線 鹿児島中央駅で下車 桜島口(東口)方面出口から徒歩約5分

設立

平成16年

診療内容

眼科全般

診療時間

月曜～金曜 / 8:00～16:30 土曜 / 8:00～12:00 / 休診日 / 日・祝日



発行 株式会社 ぎょうけい新聞社

発売 図書出版浪速社

企画



株式会社産経アドス
産経新聞生活情報センター